



中学生のころは具体的なイメージを描くことが得意で、図工、音楽、数学が好きだった

2009-6-30
朝日新聞夕刊

人生の贈りもの

「失敗学」提唱者 畑村洋太郎(68)

2

「失敗学」は失敗を生かして創造につなげる斬新な分野です。読書法も独創的だそうですね。

本を読むとき、著者と「ディベート」をしています。重要なところに赤線を引き、コメントを書き込む。一度読むと、次に赤線を引いたところだけを読み直す。読み終える時間は20分の1ですみ、1回目より深い読み方ができます。それを2回繰り返して、全部で3回は読む。最後は著者の議論が終わり、考え尽くしていく。1冊にものすごく時間がかかりますが、著者もぼくも及ばなかつたということがあります。読書を考えにたどりつくことがある。

は知識を身につけるという面もありますが、ぼくは、「どれだけのことを考えるか」と思っています。

——そうした読書法が、実際に生きた例は?

吉野家ホールディングス社長安部修仁さんの著作も、そのような読み方をしましたね。

会社更生法の適用を受けて倒産した吉野家の立て直しについて、彼から話を聞いている最中の2003年12月に、アメリカで牛海绵状脑症(BSE)の疑いのある牛がみつかつたというニュースが流れた。アメリカからの牛肉に99%まで頼つて止、代替メニュー、顧客はどう思うかなど、頭に浮かぶ項目を100ほど書き出し、それを五つのグループにまとめた。さらに、それぞれのグループに、どのような課題があるか考えて、必要な解決策を時系列に従つて示す図をつくりました。

それと同じで形があり、色があり、

安部さんの著作を読み込み、話を聞いていたから出来た作業です。最後の図には、顧客から支持された理由に、「安い」「早い」とともに「おいしい」がありました。「吉野家の牛丼を食べたい」ことに目を向ける」というものがあつた。

顧客が覚えている「おいしい」という記憶を生かせないかと安部さんに提案した。吉野家は1年後、牛丼を1日だけ復活させました。店の前にな長蛇の列ができる。吉野家の大きな味方は、客の「味の記憶」なんですよ。

——子どものころは算数が得意だったとか、図画や工作も大好きだった。それが影響しているのか、話を聞く人の

た吉野家。「ぼくが安部さんだったら、こう考える」と対応策を考えています。落語家

と同じ。聞く人がどうイメージを組

——そうした読書法が、実践に生じた例は?

吉野家ホールディングス社長安部修仁さんの著作も、そのような読み方をしましたね。

牛肉の輸入停止、牛丼の販売停止、代替メニュー、顧客はどう思うかなど、頭に浮かぶ項目を100ほど書き出し、それを五つのグループにまとめた。さらに、それぞれのグループに、どのような課題があるか考えて、必要な解決策を時系列に従つて示す図をつくりました。

それと同じで形があり、色があり、配置があると考えればいい。おいしいを考へず、一気に食べればいいなって盛り付け、出される順番がある。それと同様で形があり、色があり、はすがない。採点ミスだ」と思つていました。高校2年のとき、2、3年を対象にした数学の試験で2番だけが自信になり、「勉強しないでも合格する」と信じていた。当時は入試の得点を教えてくれましたから、問い合わせると、4段階のうち最下位。翌年受けても通らないことを心付きました。この時、「手抜きはしない。必要な努力はやり、続ける」と決めた。以降、ずっと守り続けています。(聞き手・平出義明)